

〔翻 訳〕

チャンズー・ソン 「名目上の兄弟——韓国に
帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイ
デンティティの変容」・「越境主義の時代に
おけるディアスポラ包摂——韓国のディ
アスポラの包摂は国の発展を支えること
が可能」

角 田 猛 之

目 次

訳者はしがき

[1] 「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティ
の変容」

序

I. 故国へのノスタルジアとコリアン・ドリーム

I-1 改革開放後の中国社会における朝鮮族の社会—経済的地位の低下

I-2 コリアン・ドリーム

II. 韓国系中国人帰還者に対する韓国での見かた——ビフォーとアフター

II-1 帰還以前

II-2 帰還後

III. 民族的な故国での疎外とアイデンティティへの反映

III-1 民族上の故国における阻害

結論

[2] 「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の
発展を支えることが可能」

I. 要点

II. ディアスポラ包摂政策への賛否両論のポイント

(1) 賛成論 (2) 反対論

III. 本稿の主な主張点 IV. 動機づけ V. 賛否両論

VI. 韓国人ディアスポラの包摂 VII. ディアスポラ包摂の費用と便益

VIII-1 経済上の利益 VIII-2 移民の帰還と頭脳流入 VIII-3 包摂政策の問題点

IX. 限界とギャップ X. 概要と政策アドヴァイス

訳者はしがき

本稿は『関西大学法学論集』第66巻第1号において訳出した、オークランド大学文学部上級講師・同大学韓国研究所長のチャンズー・ソン (Changzoo Song) の「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」(Identity Politics and the Meaning of 'homeland' among Korean Chinese Migrants in South Korea) 論文に引き続いて、韓国系中国人(中国では「朝鮮族」と呼称されている)およびその他の国への韓国系の移民——旧ソ連、アメリカ、カナダ、ニュージーランド、その他。ソンは彼らを「朝鮮民族のディアスポラ」と呼んでおり、彼自身が韓国系ニュージーランド人である——のアイデンティティ問題、とりわけアイデンティティの変容とその背景・原因、とくにグローバル化と経済上、人口統計学上の背景・原因を分析したつぎの2本の論文を訳出するものである。すなわち、チャンズー・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」(Changzoo Song, *Brothers Only in Name: The Alienation and Identity Transformation of Korean Chinese Return Migrants in South Korea*) および「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」(Changzoo Song, *Engaging the diaspora in an era of transnationalism: South Korea's engagement with its diaspora can support the country's development*) である。

前号の「訳者はしがき」でも提示したように、ソンの主たる研究関心はグローバル化の進行する世界において、韓国人および韓国人ディアスポラが抱くナショナリズムとアイデンティティのあり方、その変容を政治、経済、歴史、文化といったさまざまな背景の下で分析することである。それは前号の論文タイトル＝「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」が示しているように、中国に居住する朝鮮民族のディアスポラ＝「朝鮮族」に関する「アイデンティティ・ポリティクス」の問題でもある。

ソンは前論文と本号掲載「名目上の兄弟」論文を、韓国政府の研究資金を獲得しつつ、彼自身が数年のあいだに断続的に中国・延辺朝鮮族自治州 (Yanbian Korean Autonomous Prefecture) と韓国・ソウルにおいて行ってきた朝鮮族へのインタビューと参与観察にもとづいて執筆している。その際の主たる分析視角は、グローバル化＝移民の増大、多文化主義、そして中国や旧ソ連から帰還した韓国系ディアスポラが、民族上の故国(韓国)や、生国(中国と旧ソ連)との関係でいかなるアイデンティティ上の

チャンズ・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

変遷を経験したか、等々である。

また彼は、前論文の最後の部分で、韓国系中国人のあいだでのアイデンティティと帰属意識の形成と再生の理解にとって、政府が体系的に進める「ディアスポラの包摂政策」(diasporic engagement policy)が有用であると指摘している。本号の第2論文「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂」はまさにこの問題を主題とする論文である。すなわち、韓国経済の急激な変動と人口統計学上の危機(高齢化社会、出生率低下、持続的な移住の増大)に直面するなかで、世界に散らばる700万人を超える韓国系ディアスポラを韓国政府がどのようにして韓国に再統合＝「包摂」しようとしてきたかを分析している。そしてその際ここでも、経済と人口動態という社会＝経済的背景のみならず、韓国系ディアスポラがいだく韓国人としてのナショナリズムとアイデンティティの問題を、韓国への再統合＝包摂を推し進める際の極めて重要な要素として分析の基軸に据えている。それは母国を去ったディアスポラのナショナリズムとアイデンティティの問題のみならず、韓国人自身の問題、すなわちグローバル化の進展とともに、国境を越えてナショナリズムが拡大することにより、国民国家がいかにしてそのようなグローバル化の影響力を獲得するのか(非領域化されたナショナリズムとディアスポラの包摂政策)という問題でもある。

またソンは、以上の3論文から明らかなように、朝鮮民族ディアスポラのアイデンティティと固有の文化の維持と変容について、大衆文化(映画やテレビドラマ、大衆向け雑誌)や民族固有の食べ物そして言語に大きな関心を寄せている。

これら2本の論文を訳出する前に論理解の一助として朝鮮族が集住する延辺朝鮮族自治州に関する記事「延辺朝鮮族自治州について The Korean Times Opinion (2007-10-21 By Andrei Lankov) : http://www.koreatimes.co.kr/www/news/opinion/2010/01/166_12290.html 掲載の「延辺朝鮮族自治州について」を訳出しておく。

「これは中国東北部の国境地域に関する最終レポートである。延辺訪問を準備しているときに周りの人びとは現地の人とのコミュニケーションは全く問題がないと言っていた。「彼らはみんな朝鮮語を話す。」それは誇張のように思えたが決してそうではなかった。私の貧弱でひどい中国語が通じない場合にだれか周りに朝鮮語がわかる人がいないかを尋ねると直ちに見つかった。延辺は朝鮮族自治州として知られている。

1880年代から多くの朝鮮人がその地域に移住しはじめ、共産主義者が中国で権力を獲得した1949年までには、彼らは国境地域において多数派民族を形成した。1945年には約170万人の朝鮮民族が中国に住んでいた。そのうちの約50万人が1940年代後半に朝鮮に戻ることを選んだが、

約100万人がその地に留まることを決意した。

今日では朝鮮族の人口は200万人に達している。そこで中国のこの地を北朝鮮、韓国に次いで「第三の朝鮮」として描く朝鮮民族のナショナリストもいる。社会主義国の中国は民族的マイノリティの扱いについてはソビエトのやり方を見習った。したがって理想的には各々のマイノリティは国家に準じるなにかの自治を与えられなければならないのであったのである。

そのような準国家内においては固有の言語で教育が行われるし、メディアも同様である。また各政府省庁内でなにかの形でマイノリティを代表する者がいなければならない。この枠組みは延辺にも適用されており、一定の問題をはらみつつもこの政策は今のところ機能している。またこの地域の朝鮮民族は——以前のソビエトや日本、あるいはアメリカとは異なり——自らの言語を保持している。

他方で北京（中国）に対する忠誠心は強く保たれている。その地域では朝鮮語が広く使用されており、延辺の州都たる延吉の町を歩いていると朝鮮語での会話が自然と耳に入ってくる。朝鮮語は年配者だけではなく若者によっても話されている。

法律に明記されているようにすべての店や政府省庁の表示（看板）は2か国語で表記されねばならず、また中国語表記よりも文字が小さくてはいけない。地元の新聞販売店では、定期刊行の表紙にセミヌードの写真がある通俗読み物から、朝鮮語の著者の作品を刊行する内容のある季刊誌（このような季刊誌は政府の補助で刊行されているようである）まで販売している。

このような民族的色彩は観光客の注目を集めるものともなった。犬肉レストランはいたるところにあり、韓国とは異なり彼らは犬肉食を隠すことなく堂々と宣伝している。チマチョゴリの女性の写真は地元の宣伝のもうひとつの特徴である。そのようなエスニックな諸特徴を押し進めることは、韓国人と中国の他の地域からやってくる観光客をターゲットとしているようである。最近までその地域の朝鮮族はほとんどが彼らの子どもを朝鮮語の学校に通わせていた。

これらの学校でのカリキュラムは漢民族の学校と同じであるが、そこでは朝鮮語が主たる言語である。高校を卒業すると朝鮮族の若者は入学試験をパスすれば地元の大学に進学することができる〔延辺大学：1949年に朝鮮民族の高等教育のために延辺朝鮮族自治州の州都の延吉に創立された総合大学。中国語と朝鮮語の2か国で教授されており、中国全土で100校程度指定される中華人民共和国重点大学のうちのひとつである。2004年現在で学生数約2万人、大学院生3000人で、韓国、日本、アメリカ、ロシア等から約700名の留学生がいる。〕彼らは中国式の「積極的差別是正策」として奨学金を州政府から与えられている。しかしながら、もちろん朝鮮族の暮らし向きは必ずしも良くはない。

種々の規制を被ったりまたあからさまに迫害された時期もあったが、とくに1960年代の文化大革命期の狂気の10年間は過酷であった。当時は北京と平壤の関係が険悪なものとなり、そのことはこの地域の朝鮮族のコミュニティにも一定の影響を及ぼした。「1960年代後半では私はほとんど両親とは顔をあわさなかった。というのは、彼らは民族的マイノリティであるので、思想闘争のための会合に連日通わねばならず、そして非常に遅くまでそこに居なければならないからである。」と、ある中年の朝鮮族出身の企業家が私に語ってくれた。

チャンズー・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

しかしながらその時代は例外である。現在の中国の制度を必ずしも支持していないその同じ人物が、私がおの地区での差別について聞いたときにつきのように答えている。「差別だって？ 正直いってほとんど差別はない。たしかに州政府の行政を監督するために漢民族の役人を任命するが、昇進や仕事において少数民族であるという理由で問題があるとは基本的には考えていない。」

ときにはマイノリティであるがゆえに有益である場合もある。たとえば、マイノリティ集団の出身であれば大学に入るのが容易な場合がある。しかし近年はこの地域の状況は急速に変化してきている。朝鮮族は彼らの使用言語を朝鮮語から中国語に変更しはじめている（より正確に言えば、朝鮮語を話す家族に生まれた子どもにとってもだんだん中国語が母語になりつつある）。朝鮮語の学校は大きな危機に直面しているのである。

よく知られた種々議論がなされている統計によると、2000年に朝鮮語の学校に登録されている児童数は1996年段階での児童数の45.2パーセントにすぎない。また1990-2000年のあいだには、学校閉鎖のために4200人の教師、すなわち全教師の約53パーセントが失職した。私が話せた若者はしばしば朝鮮語で会話するのは非常に難しく、できる限り中国語での会話に切り替えようとした。家では年長者には朝鮮語で話しているが、ふたつの言語のうち中国語で話すのが自然である。

要するに同化が進行しはじめており、おそらくそれを止めることは不可能であろう。朝鮮族は村を離れて町に行き、そこで中国人と一緒に働いている。彼らは相互に通婚し、その結果中国語のみがこどもたちの唯一の言語となっている。好むと好まざるとにかかわらず、「第三の朝鮮」の時代は終わったようである。」

以下でソンの2本の論文を訳出する。

[1] 「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感と アイデンティティの変容」

序

中国に居住する200万人の朝鮮族（ethnic Koreans）は、19世紀後半と20世紀前半のあいだに満州（今日の中国の東北3省、すなわち吉林省・遼寧省・黒竜江省）に移住した朝鮮民族（Koreans）の末裔である。漢民族（Han Chinese）あるいは朝鮮民族が満州族（Manchus）[清朝]の祖先の地に移住することを禁ずる政策の故に、19世紀中葉以前は満州にはあまり人は住んでいなかった。後にその政策が緩和され、ロシアの侵略から満州を守るために1885年に満州族は、漢民族と朝鮮民族に満州に移住することを許可した¹⁾。朝鮮民族はさまざまな時期に朝鮮のさまざまな地域から満州に移住した。初

期の移民は朝鮮半島の北端の地域から移住した貧しい農民で、朝鮮から豆満江（River Tuman）を渡って満州南部の間島（Kando（Jiandao））に移住した。

朝鮮半島が日本によって占領されていた20世紀初頭にはより多くの朝鮮民族が満州とロシアの極東地区に移住した。日本統治のあいだ、貧しい人びとや日本統治から逃れるという政治的な動機をもった朝鮮人は満州とロシア極東地区に移住し続けた。とくに日本が中国を侵略し1932年に満州国を建国した後は、朝鮮半島南部に居住していた朝鮮の貧農は日本政府によって——彼らに土地と資源開発を担わせようとしていた——満州北部に移住することを半ば強制された。

第2次世界大戦のあいだと戦後の東北アジアの政治的展開は、満州の朝鮮族の生活にさまざまな変化をもたらした²⁾。1945年の大日本帝国の崩壊と朝鮮解放の直後に約70万人の朝鮮民族が満州から朝鮮に帰還した。さらに、1940年代の中国における内乱と政治的混乱、ソ連とアメリカによる朝鮮の占領、そして朝鮮戦争（1950-1953年）が満州の朝鮮族の生き方をより複雑にした。1949年に中華人民共和国が建国されたときに満州の朝鮮民族は、反日闘争と内乱のあいだ中国共産党を支持した故に、正統な公民（citizens）として承認された。朝鮮族は支配階級たる漢民族と同等の権利を享受し、1952年には延辺朝鮮族自治州が設立された³⁾。冷戦のあいだ中国は北朝鮮（North Korea）のみを唯一の正当な朝鮮民族の国家として承認し、韓国（South Korea）は正統性を有しない政治体と考えていた。したがって中国に居住する朝鮮民族は北朝鮮のみと関係を維持することができ、彼らは韓国とは完全に関係を断ち切られた。このような状況は、冷戦が終結し、中国が改革開放政策を受け入れた1980年代に変化した。中国が外国に門戸を開いた1980年代半ばまでには、韓国系中国人（Korean Chinese）は韓国のこと——とりわけ北朝鮮が置かれていた貧困とイデオロギー的締め付けとは対照的な経済の繁栄について——を学んでいた。そこで1980年代半ばには、「血は水よりも濃し」（“blood is thicker than water”）というフレーズが、韓国系中国人——彼らは韓国を長期間喪失していた故国（homeland）（Hö 2001b：456-457）と考えた——のあいだで広まった。彼らは1980年代後半には韓国を訪問し、80年代末までにはすでに数千人の韓国系中国人が韓国に滞在していた。中国からの朝鮮族の帰還者数は、韓国と中国のあいだの国交が1992年に確立されて後には劇的に増加した。毎年数万人の韓国系中国人が韓国を訪れ、彼らの多くはそこで働くことを選んだ。現在37万人以上の韓国系中国人が韓国に居住しており、そのうち10パーセント程度が正式書類を有しない移民労働者である。中国と韓国の両文化に慣れ親しんでいる韓国系中国人は、韓国に容易に適応し、中国と

チャンズ・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

韓国の双方にまたがる生活スタイルで暮らしていた。

以上のような韓国系中国人の民族的帰還は、過去20年間の中国と韓国のマクロ経済と社会—政治的状况の変化によってさらに推し進められた。すなわち、中国がグローバル経済に門戸を開いて参入したことで、韓国が労働者の輸出国から輸入国に転換したことである。中国の沿岸地区の経済状況は改革開放政策以後に急速に好転したが、朝鮮族が集住する辺境の中国東北部は経済発展から取り残されていた。その故に、韓国系中国人は中国の都心部や海外、とくに韓国に職を求めることとなった。そして、韓国経済が安価な労働力を必要とするようになり、また韓国人は——彼らが何十年にもわたって離れ離れになっていた中国に居住する同胞へのノスタルジーから——このことを好意を持って受け入れていた。

しかしながら、このような韓国系中国人と韓国人の期待とノスタルジックな感情は、1990年代を通じて極めて多くの韓国系中国人が韓国に移住してくるにつれて裏切られていった。韓国系中国人は韓国の同胞から受けた差別的扱いと、韓国人が就業しない3D（汚い、危険、きつい）労働という外国人労働者の過酷な現実を目の当たりにして失望させられた。反面に韓国人は、中国からやってきた「中国化した」（“Sinicized”）同胞への幻滅感を抱いていった。故国で阻害され周辺に押しやられたことで、韓国系中国人は自らが朝鮮人ではなく中国人であると認識しはじめた。それはちょうど、日系ブラジル人帰還者の日本への帰還経験から、自らのブラジル人としてのアイデンティティを強めたのと類似している（Tsuda 2000, 2001, 2003；第9章）。

このような韓国系中国人の認識の変化は、朝鮮民族のナショナリズムとナショナル・アイデンティティ（それらは朝鮮民族の「血」と民族的同質性という原初的な観念に基礎づけられている）に関してひとつの課題をもたらした⁴⁾。この重要な問題を検討するために本稿では、韓国人と韓国系中国人のふたつの集団が——相当数の韓国系中国人が韓国へ民族的帰還を果たした後に——当初の段階では双方ともに有していた肯定的感情から否定的感情へと変化していったプロセスを検討する。とくに本稿では、韓国での民族的帰還の経験に関連して、韓国系中国人が抱いていた「故国」の観念の変遷と、故国におけるこれらの阻害経験が彼らのナショナル・アイデンティティをどのように変遷させていったのかについて検討する。

韓国での韓国系中国人のアイデンティティの変遷を理解するためにわたしは、2004年末と2005年初頭に韓国で12名の韓国系中国人の帰還者に詳細なインタビューを行った。そしてこれらのインタビューの結果を、韓国系中国人に関する文献と彼らの故国との関

係に関する韓国系中国人の研究者の議論と合わせて検討した。さらに、韓国系中国人に関する韓国人の観念に関しては、映画やテレビドラマ、メディア報道、等々、韓国で広く普及している言説においてどのように描かれているのかということを検討した。

I. 故国へのノスタルジアとコリアン・ドリーム

1980年代までは韓国系中国人は韓国とその社会について多くを知らなかった。かりに彼らがなにがしかの知識を有しているとするれば、それは中国と北朝鮮が流す冷戦下でのプロパガンダによって影響を受けた偏ったものであった。韓国系中国人が韓国に関してより現実的見かたをするようになったのは、韓国で開催された1986年のアジア競技大会 (Asian Games) と1988年の夏季オリンピック以後のことである。これらの大きなイベントを通じて彼らは故国の経済発展に強く印象づけられ、多くの人が韓国の親族を訪問することを望んだ (Chōng 2000 ; Im 2003)。しかしながら、当時の中国では海外に出かけることは容易ではなかったため、多くの人が訪問できたわけではなかった。それに加えて彼らが韓国に入学するためには、韓国の親族からの招待状を提出することが求められていたが、何十年にもわたって疎遠だったために親族から手紙を受けることは容易ではなかった。多くの韓国系中国人が韓国を訪問することができるようになったのは、1992年に韓国と中国のあいだに国交が回復してから後のことである。それ以後は毎年何万人もの韓国系中国人が韓国を訪問した。彼らは職業訓練生や移民労働者、学生、旅行者、そして韓国人の花嫁として訪問した。韓国に入国した場合には彼らの大半はビザの類型に関わらず職を求めた。というのは、韓国では母国の20倍程度の収入を得ることができるからである。韓国系中国人は直ちに韓国における最大の外国人労働者の集団となった。1990年代半ばまでには10万人を超えており、それは中国に居住する韓国系中国人全体の5パーセント強、あるいは、韓国系中国人労働人口の10パーセント以上であった (Kwon and Pak 2005 : 147)⁵⁾。そのような韓国系中国人の大規模な民族的帰還の背景には、経済的、社会的、そして文化的要因が控えている。まず第1に、中国と韓国での雇用機会と賃金の大きな格差が最も重要な要因である。また移住に当たっては、彼らが韓国語を話せることがそれを後押ししている。そして韓国は彼らの父祖の故国であり両国は地理的にも近接している。重要かつ根本的なもうひとつの要因は、漢民族と比較して韓国系中国人の社会・経済的地位が相対的に低いことであった。これらのさまざまな要因が彼らの父祖の故国へのノスタルジアを推し進めたのである。

I-1 改革開放後の中国社会における朝鮮族の社会—経済的地位の低下

韓国系中国人の研究者は中国における朝鮮族の経済的地位が改革開放以後低下していることを明らかにしている (Chōng 2000 : 93)。私がインタビューした人の多くは、彼らの隣人たる漢民族と比較して朝鮮族の社会 - 経済的地位がここ20年間で低下してきていると私に語っている⁶⁾。このような経済的地位の低下とともに、延辺朝鮮族自治州や地方の朝鮮族の村では彼らはだんだんと政治的にも阻害されてきた。徐々にそれらの地域に多くの漢民族が移住してきた結果、朝鮮族はマジョリティ集団たる民族的地位を喪失していた。このような事態に韓国系中国人は憂慮していた。というのは彼らは中国国内において、それまでは経済的豊かさや高水準の教育を誇りにしていたからである。

農耕のやり方の違いから朝鮮と中国の開拓民は満州移民の初期の頃から別々のコミュニティを形成していた。水稲耕作を行う朝鮮移民の大半は川沿いの低地部に移住した (Chōn 1991 : 80)。それに対して、多くが山東省の貧困地域からやってきた漢民族の開拓民は、通常は乾地作物を耕作するので高地に移住した。民族固有のコミュニティを形成したので、朝鮮開拓民は韓国において有していたライフスタイルをそのまま維持した⁷⁾。彼らはまた1940年代中葉に至るまで母国と密接な関係を維持し、韓国から常に移民がやってきていた。中華人民共和国建国の後には朝鮮族は漢民族と同じ公民権と土地を与えられた。満州居住の80パーセント以上の朝鮮族が農場主であり、その大半が1980年代以前は稲作に従事していた (Hō 2001a : 265)。中国東北部では米は乾地作物よりも価格が高いため、朝鮮族は中国東北部の田舎の中国人の隣人よりもよい生活を享受していた。彼らはまた中国の全少数民族のなかで最も高い教育水準を維持しており、中国では最も成功を収めた少数民族と考えられていた (Chōn 2000 ; Hoffmann 1986 ; Lee 1986)。

しかしながら1980年代後半までには、韓国系中国人は同地域の漢民族と比較して社会 - 経済的地位が低下してきていると感じていた。その大きな理由は、改革開放後の中国における都市部と地方のあいだの発展の度合いの不均衡さである。都市部の経済は急速に発展したが地方の経済はそれほど発展せず、かつこのようなギャップは過去20年間拡大し続けている。延辺の経済発展のスピードは中国の他の地区のスピードよりも遅かった。1949年から1989年のあいだの延辺の年間平均生産高の伸びは9パーセントであるのに対して、中国全体で13.9パーセント、吉林省では12.2パーセントであった (K. Kim 1998 : 10-11)。さらに朝鮮族の経済的地位は中国東北部の田舎の漢民族よりも低下した。これは朝鮮族が稲作農業に固執したのに対して、漢民族の隣人たちはさまざまな小規模

ビジネスに従事することで彼らの経済活動を多様化したからである (Chon 2000 : 93)。朝鮮族の研究者は漢民族の生活水準が1990年代の中国東北部においてどのようにして朝鮮族の水準を超えていったかを描き出している。

海外で働いている朝鮮族の場合を除いて中国人の生活水準は一般に朝鮮族の水準よりも高い。……朝鮮族の「低地経済」(field economy)は延辺地区の漢民族の「高地経済」(hill economy)の発展の度合いよりも緩慢である (Ryang 2001 : 155)。

さらに朝鮮族は彼ら自身のコミュニティ内での政治的地位が漢民族の地位よりも低いと感じている。彼らは主流の漢民族と同じ権利を享受していると一般に考えているが、政治的には完全に漢民族によって支配されていることを明確に認識している⁸⁾。このことは1950年代と1960年代、すなわち、大躍進運動 (Great Leap Forward Movement) や文化大革命 (Cultural Revolution) といった超左翼的な動向の下で民族的マイノリティが大きな苦難を被った時においてとくに著しい⁹⁾。私のあるインフォーマントはつぎのように語っている。中国政府は民族的マイノリティに対しては相対的に寛容であるが、朝鮮族のいかなる政治的な運動も常に政府によって念入りにチェックされ、また朝鮮族は地方の自治政府内においてすら実際には権限を与えられていない、と¹⁰⁾。また別のインフォーマントはつぎのようにのべている。「わたしたち朝鮮族は延辺朝鮮族自治州においてすら二級市民だ。朝鮮族は名ばかりの地位を与えられているが、実際の権限を握っているのは漢民族だ。」そしてまた、韓国系中国人のあいだでの出生率——中国の全民族的マイノリティ中で最低の率——が低下し、漢民族においてナショナリズムが高揚してきている。したがって今日中国の朝鮮族は「経済的地位において相対的に低く、漢民族籍を有する人びとによって支配されている中国の主流社会から締め出されている」という思いを強く有している (Kim 2003 : 110-111)。漢民族が支配していることへの懸念と彼ら自身の政治的弱さ故に、朝鮮族の父祖の故国へのノスタルジアを高めている。テッド・ガル (Ted Gurr) (1970)によると、フラストレーションは過酷な貧困と抑圧が当該社会で当たり前になっているときにのみ、マイノリティ集団によって必然的に抱かれるものではない。フラストレーションはむしろ、事態が改善されている場合でも、マイノリティ集団が「相対的な喪失感」を感じるときに抱かれるのである (Gurr 1970)。1980年代と1990年代を通じての中国東北部での朝鮮族が置かれた状況がまさにそれである。韓国系中国人が自己実現するための政治的チャネルを有していないことにフラストレーションを感じているときに、国境を越えて彼らの母国に目を向けた

チャンズー・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

のである。そして事実、国境を超えるとまさに母国である民族的マイノリティとして、韓国系中国人は歴史的に「越境」してきているのである。ある韓国系中国人研究者が指摘しているように、中国の朝鮮族は「国境の民」(Kim 2001a: 25)という特性を有しており、彼らとはくに困難な時代には越境する機会を求める傾向がある。1960年代と1970年代の中国における政治的混乱の時代には、数千人の朝鮮族が北朝鮮に逃れた(Hō 2001a: 259)。1980年代後半以来数万人の韓国系中国人が露天商としてロシアに逃れ、現在もその内の3万人以上が居住している(Kim 2004 参照)。いずれにしろノスタルジアは豊かな母国の存在を知らながら故国の外で困難さを経験している場合に高揚する傾向がある。1980年代までには韓国系中国人は違法な手段によってでも韓国に職を求めるための準備が整っていた。大金を携えて帰郷した多くの韓国系中国人の成功物語は「コリアン・ドリーム」(‘Korean Dream’)——韓国で働くとすぐ金持ちになる——を、他の韓国系中国人のあいだに広めていったのである。

I-2 コリアン・ドリーム

1980年代末の韓国系中国人の民族的帰還の背後に控えている反発要因が——中国における社会・政治的な地位の相対的低下によって増幅された——彼らの民族的故国へのノスタルジアであるとすれば、雇用機会と高賃金とその誘因である。最近まで韓国は移民に関しては典型的な「送り出し」国であった。1970年代と1980年代を通じて毎年何万人もの韓国人がアメリカや日本、西ヨーロッパといった豊かな地域に移住していた。しかし1990年に韓国は「転換点」を超え、入国する外国人労働者の数が出国する韓国人の数を上回った(Park 1994)。これは韓国における社会的、人口統計学上の変化と結びついた、継続的な経済成長の故にである。しばしば暴力を伴ったデモやストライキに発展した1980年代と1990年代の労働争議の頻発により労働コストが増大した。同時に、西洋流の経済パターンに従って韓国の産業は1980年代に、「大量生産」(‘Fordist’ production)・蓄財システムから、より「弾力的な」(‘flexible’)生産・蓄財システムへと転換した(Harvey 1989: 145)。さらに韓国の雇用主は生産設備を海外に移転させ、発展途上のアジアの国々から低コストで御しやすい外国人労働力を導入しはじめた。1980年代におけるこのような韓国の産業と労働市場の転換に伴って韓国に韓国系中国人がやってきたのである。

韓国系中国人が韓国に住む彼らの親族を訪問しはじめた1980年代後半に、韓国の親族への土産として中国の生薬(herbal medicines)を持参した。そしてそれらの生薬を

路上で販売する者もあり、好奇心が強いとか同情心のある韓国人はそれらを購入した。そして早々に生薬販売は韓国系中国人訪問者のおなじみの商売になった。成功物語が中国の朝鮮族コミュニティに広がり、さらに多くの韓国系中国人が韓国を訪問した。中国で得られる少なくとも10倍から20倍の稼ぎを得ることができるので、彼らの多くは韓国で職を求めた (Im 2003: 293)。韓国で数年間働いた後に彼らは「金持ち」になって帰郷し、土地や家を購入し商売をはじめた。1990年代初頭の「コリアン・ドリーム」の典型的な成功物語はつぎのようなものである。

キム氏 (38歳) は延辺朝鮮族自治州の延吉市に住んでいる。……彼は1991年に韓国の親戚からの招待状を携えて韓国にやってきた。韓国行が決まった時に彼は家を売って大きな資金を用意し、親戚からも借金した。そして大量の生薬を仕入れて「コリアン・ドリーム」を抱いて韓国を訪れた。彼は混雑するソウルの地下鉄駅で生薬を売って1年足らずで大金を稼いだ。そして延吉に戻って町の中心にあるアパートを購入し、また毛布工場と2軒のレストランを開店した (*Chosun Daily*, January 21, 2000)。

多くの韓国の製造業者は1990年代に安価な労働力とより大きな市場を求めて中国に工場を移転させた故に、彼らは同時に韓国系中国人に対して雇用の機会をも提供した。これらの工場は青島 (Qingdao) や天津 (Tianjin)、大連 (Dalian) といった沿岸都市に集中し、また彼らは韓国語と中国語の両方が話せる韓国系中国人を雇い入れた。それらの地域の中国人が経営する会社よりもこれらの韓国人の会社は通常は高い賃金を支払ったので、韓国系中国人にとっては金儲けの絶好のチャンスであった。このような経験はよりよい仕事を求めて韓国を訪問することを強く推し進めた。韓国では雇用主は他の外国人労働者よりも韓国系中国人を望んだ。というのは彼らが韓国語を話すことができるからである。韓国系中国人の労働者は会話能力が求められる建設業や家政婦などに集中した。他方で中国、バングラデシュ、フィリピン、ウズベキスタンなどの朝鮮民族以外の労働者は製造業部門に雇用された。これらの韓国系中国人のなかでは成功した者もあれば失敗した者もあるが、成功した者はその他の韓国系中国人に新たな希望の光を与えた。成功して帰郷した者は高級レストランやバー、タクシーを雇うなどして富を見せびらかすことで、その他の人びとに「コリアン・ドリーム」をさらに広めることになったのである。

II. 韓国系中国人帰還者に対する韓国での見かた——ビフォーとアフター

韓国系中国人が帰還以前に父祖の故国に対するノスタルジックな思いを募らせるにつ

チャンズー・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

れて、韓国人もまた中国に居住する同胞に対してノスタルジックな感情を高揚させた。まず第1に韓国のナショナリストの描く歴史においては、植民地時代に反日闘争を戦ったものとして韓国系中国人を位置づけている。さらにまた韓国人は、彼ら自身が産業化のなかで失ってしまった多くの朝鮮民族のかつての伝統を保持しているという事実をも高く評価していた。さらにまた韓国人は、韓国系中国人は民族の統一において重要な役割を果たすだろうというロマンチックな考えをも抱いていた。しかしながらこれらの肯定的見かたは、1990年代の大規模な韓国系中国人の帰還を目の当たりにして、困難な問題に直面した。さらに、韓国人が抱いている韓国系中国人を受け入れた故国（すなわち中国）に対する否定的イメージから彼らは逃れることはできないのである¹¹⁾。

II-1 帰還以前

韓国人の中国在住の同胞は1980年代半ばまで韓国のことをそれほど知らなかった故に、彼らは中国（とソビエト）の朝鮮族にはあまり関心を払っていなかった。しかしながら1980年代半ば以降は、韓国のメディアは彼らについてしばしば報道しはじめた。このような変化は冷戦終結に伴ったものであるが、同時に、韓国の経済発展と社会主義体制をとる隣国との1980年代における経済的、政治的関係の拡大の結果でもある。それ以来30年以上にわたって韓国経済は急速な発展を示し、交易相手の多様化と新たな市場の展開が不可欠な段階へと至っている。したがって韓国企業の指導者たちは中国とソビエトという新たな市場へとビジネスを拡大することに熱心であり、また彼らはこれらの国に居住する朝鮮族が彼らのビジネスの展開にとって有益であることを認識した。また韓国政府は北朝鮮政策に関して中国とソビエト（後のロシア）の政治的支援を求めていた。韓国の企業の指導者と政治家がますますこれらの国の朝鮮族の重要性を強調しはじめたのはこのような文脈においてである¹²⁾。韓国が取るべきグローバルな経済政策にとって在外朝鮮民族が重要であることを明確に主張している、韓国のあるシンクタンクの研究によって提示されたつぎの見解はこのようなトレンドを示している。

中国に200万人の朝鮮民族、日本に80万人、アメリカに120万人、そして前ソビエトに50万人が居住している。在外朝鮮民族の規模はほぼ500万人におよぶ。……これらの在外同胞と共にわれわれは「汎・コリアン経済・文化コミュニティ」（“Pan-Korean Economic and Cultural Community”）を形成し、これらの在外朝鮮民族をわれわれと彼らの受け入れ国とのあいだの相互関係を促進するような仲介役を果たすように導かなければならない（Ku 1995：177-178）。

「現代」（Hyundai）会長の故・鄭周永（Chong Chu-yong）もまた、同社のシベリア

の自然資源開発プロジェクトに関して中国とロシアの朝鮮族の重要性を強調していた。彼は日本との競争に関連してこの点を強調している。

日本はわれわれよりもかなり早い段階からシベリアの資源開発に着手しているが……サハリンとシベリアに多くの韓国系中国人が居住しているので彼らを出し抜くことは可能である。そしてまたわれわれは、シベリアでの資源開発プロジェクトにおいて韓国系中国人の労働力を利用することができる。……われわれと共通の文化と言語を共有する人びとが協働することは、外国人と一緒に働くことよりもはるかに容易である (Chong 1997 : 141-142)。

同様に多くの韓国人は、ふたつの朝鮮を統一する際の韓国系中国人の重要な役割を強調している。中国での社会主義に対する韓国系中国人の経験と北朝鮮との親近性を強調しつつ、韓国のナショナリストは韓国系中国人を「統一の伝道者」と見ている (Yi 1994 参照)。韓国系中国人の知識人たちも同様な信念、すなわち、韓国系中国人は分断された故国統一に貢献するという信念を共有している (Chong 1996 ; Kim 2001b)。そのような期待は、植民地時代の中国における朝鮮民族の反日闘争を称賛する韓国の歴史家によってより高められている。また多くの韓国の歴史家は、今日の中国の朝鮮族は日本の帝国主義的野望のために日本の植民地主義者によって満州へ強制移住させられた、朝鮮民族の被害者の末裔であるということをも強調している (Pak 1990 ; Yi 1994 参照)。

韓国人はまた、中国の同胞が中国文化の影響に晒されているにもかかわらず、多くの古い朝鮮民族の伝統を保持していることを称賛している。その故に韓国人はしばしば韓国系中国人を文化的に「純粹」だとして称賛する。そしてこのことは、彼ら自身が近代化と産業化の進展のなかでかつての朝鮮民族の伝統を喪失したことに対する哀悼の意が込められているのである。そしてまた過去10年間の韓国における韓国系中国人に対する大衆向けの文化的な種々の表現においても、韓国系中国人に対する韓国人の肯定的な認識が示されている。たとえば韓国の映画やテレビドラマは韓国系中国人の女性を——控えめにはないとしても——純粹で無垢な女性として描くことで肯定的に特徴づけている¹³⁾。2004年に開かれた最近の *Pinguori* 展示をも含めて、過去10年間に韓国で催されたさまざまな韓国系中国人の写真展示はそのような見かたの好例を示している¹⁴⁾。そこで展示されている多くの写真は田舎に暮らす韓国系中国人の写真で、彼らは韓国では消滅して久しい伝統的な農耕器具を用いている。これらの展示は、韓国系中国人をかつての伝統を保持し続けている人びととして示しているだけでなく、彼らと発展の遅れた国としての中国の生活様式の素朴さを示唆している。したがってこれらの展示は古き時代への韓国人のノスタルジアと中国における彼らの同胞に対する共感を鼓舞するので

チャンズー・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

ある¹⁵⁾。

そのようなものとして、韓国人は韓国系中国人を「純粹」で伝統的、忠実であって朝鮮民族の将来にとって有益な人びととしてイメージしたのである。それにもかかわらず、朝鮮民族のナショナリストが抱いた期待に満ちた肯定的見かたは、必ずしも一般の韓国人によって共有されてはいなかった——それは、隣国のルーマニアからのハンガリア系の民族的帰還者に対するハンガリア民族のナショナリストの見かたの場合と類似している（本書第7章参照）。

II-2 帰 還 後

中国在住の同胞が当初抱いていた期待や好奇心、同感などの後に、多数の韓国系中国人が韓国に帰還してきてからは、彼らに対するアンヴィヴァレントな態度を韓国人は取りはじめた。1990年代を通じて韓国メディアにおいては韓国系中国人に関するネガティブな報道が徐々に増えてきた。朝鮮族（*Chosŏnjok*）——韓国人は通常韓国系中国人をそう呼んでいるが、それは後には侮蔑的意味を持つようになった——に対するお馴染みの批判としては、労働に関する倫理観の弱さ、日和見的態度、信頼できないこと、そして韓国への忠誠心の欠如、などにかかわるものである。これらのネガティブな資質は、韓国系中国人がその態度や行動において過度に「中国化している」ということと結びついていると考えられた。

先に言及した1990年代初頭の生薬取引は、韓国系中国人が韓国人からネガティブな認知を得た最初の大きなことがらであった。韓国系中国人の露天商の数が増えるにつれて、生薬に関する消費者たちの苦情が寄せられた。これらの苦情は1990年と1991年に韓国で広く報道されたが、その報道は韓国人に対して、韓国系中国人が持ちこむ中国産の生薬は品質が悪く、大した医学的効能はないということを印象付けた。その後1991年11月に韓国当局は、路上で中国産の生薬を販売することを禁止すると発表した。それに続いて、韓国系中国人によるビザ規制違反や犯罪が報じられた。最も注目されたケースのひとつが、1996年8月に南太平洋上の韓国漁船で6人の韓国系中国人の乗組員によって11名の韓国人とインドネシア人が殺害された事件である（*Chosun Daily*, August 26, 1996）。ただしこの事件は、韓国人上司による韓国系中国人乗組員に対する虐待によって引き起こされたと後日報じられたが、大半の韓国人にとってはショッキングなニュースであった。多くの韓国人は韓国系中国人に同情的であったが、これらの事件は彼らに対する韓国人のアンヴィヴァレントな思いをさらに助長した。また韓国人は正式書類を持たない

韓国系中国人移民労働者の増加を懸念していた¹⁶⁾。

韓国の雇い主はだんだん韓国系中国人の雇い人の性格に関して不満をのべるようになった。社会主義体制からやってきた韓国系中国人は資本主義社会の高度な労働生産要求を満たすことはできない、というのがその一般的見解である。韓国系中国人労働者は「労働に関する倫理観が弱く」、「お金にのみ執着し」そして「信頼できない」といわれた (U and Han 2002 ; Yu 2002)。韓国のある大衆向け新聞はかつて韓国系中国人労働者を雇用していた建設会社の社長の言葉を引用して、韓国系中国人のネガティブな性格についてつぎのように報道している。

韓国系中国人労働者は非常に日和見的で狡猾である。彼らは強固に組織化されていた。リーダーによって統率された10人程度のチームをつくり、互いに携帯電話で連絡を取り合っていた。ある現場で給料が高いということをリーダーが他のメンバーから聞きつけると、彼らは雇い主に何も言わずにその夜のうちに現場を去る。いなくなった韓国系中国人の代わりに労働者を見つける方法がないので、多くの建設会社は損害を被った (*Donga Daily*, August 17, 2002)。

そのような韓国系中国人の「信頼できない」行動に対する批判を、彼らを雇用している中国在住の韓国人雇い主も同じく有していた。このことは、中国で100人以上の韓国人実業家にインタビューを行ったふたりの韓国人ジャーナリストが2001年に余すところなく報じている。報道によると90パーセントの韓国人の雇い主が、韓国系中国人の雇い人に騙された経験を有していた (U and Han 2002)。中国で事業をはじめた当初は、彼ら自身は中国語を話せないので韓国系中国人を雇用していた。しかし後には彼らは韓国系中国人を避けて漢民族を雇うようになった (U and Han 2002 : 148)。同様なエピソードが中国の韓国系中国人の新聞でも報道されており、そのうちの一紙は、韓国系中国人労働者は「怠惰」で初めから高い賃金を要求するという韓国人実業家のことばを引用している (Höo 2001b : 463)。

韓国系中国人に対する韓国人一般のネガティブな認識を反映して、韓国のポップ・カルチャーも同様な批判的態様で韓国系中国人を表現している。とくに、彼らは金銭欲が強く詐欺的な人物として描かれている。たとえば1998年の映画の *Namnam Pungnyo* (「南の男と北の女」) は延吉 (延辺朝鮮族自治州の州都) の韓国系中国人を臨機応変で金を横領し、恥知らずな人物として描いている。彼は純真な韓国の少年を騙すのである。韓国人が抱くそのような韓国系中国人のイメージは、発展と文明化の程度が遅れた国たる中国のあらゆるネガティブな信条から免れていない人びととして彼らを見ているという事実を反映している。ある意味で韓国人は韓国系中国人を、中国以外の「在外同胞」

チャンズー・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

とくにアメリカや日本、西ヨーロッパといった豊かな地域の同胞と区別している。これらの人びとは文明化されているが（本書第12章参照）、韓国系中国人の大半は韓国において3Dの仕事をするのを望む貧しい同胞であると見ているのである。

韓国人はまた、韓国系中国人は彼らの態度においてのみならずアイデンティティにおいても「中国化」されすぎていると見ている。「朝鮮民族たること」（Koreanness）は民族的のみならず文化的意味をも含意していることを強く前提しており（Lie 1998；Shin 2006 参照）、さらにまた、「朝鮮民族」（“Koreans”）は朝鮮語を話し朝鮮民族としての明確なアイデンティティを有していなければならないということをも強く前提としている。したがって韓国人は韓国系中国人が自らを「中国公民」としてのアイデンティティを有している場合には強い苛立ちを覚えるのである。中国に生まれ何十年ものあいだ中国で育った故に、韓国系中国人は通常中国を「祖国」（‘fatherland’）そして韓国を「母国」（‘motherland’）と考える（Choi 2005：67）。さらに彼らは中国の56の民族集団のひとつとして、民族的には当然に「朝鮮民族」（*Chosŏnajok*）と考えるが、政治的には「中国人」と考えている。韓国人のネガティブな捉え方を十分に認識しているので、韓国系中国人は可能な限り自らのアイデンティティを隠そうとする¹⁷⁾。しかし自らのアイデンティティを話さなければならない場合には彼らは多くの場合「中国人」と答える。このような一見控えめに見える言明は、民族的、文化的なアイデンティティに対して本質主義的な態度をとる韓国人の気分を損ないがちである。

韓国人が韓国系中国人を彼らと同じ「朝鮮民族」と考えることができないとすれば、韓国系中国人は「中国人」以外の何者かでありうるだろうか？ 韓国人による排斥とネガティブな態度に直面して多くの韓国系中国人は、彼らの民族的な故国において「朝鮮民族」であることに対して疑問を抱くようになったのである。

Ⅲ. 民族的な故国での疎外とアイデンティティへの反映

韓国系中国人に関する当初のロマンチックな期待が彼らの大規模な帰還に直面して大きく崩れていくにつれて、大半の韓国系中国人もまた、民族的な故国へのノスタルジックな愛着が韓国にやって来た時に大きな試練を受けていることを見いだした。まずは安価な労働力として彼らは韓国で過酷な労働条件に遭遇し、中国にいた時の地位が低下した。そして彼らはアメリカや日本のような豊かな国からやってきた他の在外朝鮮民族と比べて差別されていた。そのことから彼らは民族的な故国において阻害されていると感じたのである。

Ⅲ-1 民族上の故国における阻害

韓国系中国人の「コリアン・ドリーム」は、韓国への入国ビザを取得することが困難である故に元々から容易な夢ではなかった。韓国政府は韓国系中国人を含めて外国人労働者への入国ビザを厳しく制限していた。第1に、一定数の未熟練外国人労働者を工業部門に受け入れる「産業訓練スキーム」があった。しかしながらこのスキームはうまく機能しておらず、労働者を搾取するものとして批判されていた。2004年に新たな「雇用許可制度」が発足し、外国人労働者により大きな自由と平等な権利を認めた。中国と独立国家共同体（CIS）出身の朝鮮族が優先権を付与された——彼らに用意された割り当ては実際の応募者数を常に下回っており、したがって多くの不法移民を生みだしていたが——はこの制度の下においてであった¹⁸⁾。このような状況の下では最近まで、韓国系中国人が入国ビザを得るためにブローカーに多額の金銭を支払うことはまれではなかった。大半の場合に彼らは7千ドルから1万2千ドルをブローカーに支払っていた（Kwon and Pak 2005：167）。そしてビザのブローカーがらみの詐欺事件がしばしばメディアで報じられていた。大半の者が韓国に行くために親族や友人から借金していたので、この種の詐欺事件は悲劇的な争いを生みだし、しばしば債務を返済できないため家族崩壊に至っている（Chong 2000：172；Im 2003：335）。このようなことから、韓国系中国人が厳格なビザ規制に対して韓国政府に異議を申し立てるようになった。

韓国に到着すると韓国系中国人は新しい社会への適応問題に直面し、また多くの人は自らの置かれている地位の低下を経験した。先に言及したように、中国の朝鮮族は一般に他の民族集団よりもよい生活状況を楽しんできており、中国では高い自尊心を有していた。さらに移民労働者の多くは中国では管理者か専門職であった。しかしながら韓国では韓国人が嫌う建設もしくは家政婦といった肉体労働に従事しなければならない。韓国での賃金は中国よりもかなり高額である。しかし韓国系中国人は韓国では経済的に周縁化されていることを明確に認識し、また韓国での一般的な生活条件はみじめなものであった。大半の者は月に100万から150万ウォン（千から二千ドル）を稼ぐためには、生活を極度に切り詰めたうえに1日10時間程度働いている。そのような過酷な状況から、彼らは中国においては賃金は低いがより人間らしい生活を送っていたと感じていた。私のインフォーマントの大半は、一時的に韓国に居ただけで十分なお金をもうけたら中国に帰りたいとのべた。というのは、彼らは韓国で稼いだお金で中国ではより良い暮らしができるのに対して、韓国に居る限りは周縁化された生活を送ることになるからである¹⁹⁾。

チャンズー・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

韓国系中国人が韓国において遭遇するさらに困難な問題は、彼らが韓国同胞から蒙る偏見と差別である。上でのべたように、韓国人たちは彼らは信頼できず、能力において劣っており、また中国が有しているさまざまな悪い側面から免れていないと考えている。したがって、韓国系中国人に対して「冷酷」で「傲慢」であると韓国人は見ている。日系ブラジル人——彼らは日本人の子孫であるにもかかわらず日本においては日本人とは見られておらず、ブラジル人と日本人との文化的な相違のゆえに、外国人としてエスニックな側面から周縁に追いやられている (Tsuda 2003, Chapter 9) ——と同じく、韓国系中国人は韓国においては同じく周縁化され疎外されているのである。大半の韓国系中国人は、韓国人は利己的で傲慢であり、そして「人間味にかける」(“not humane” *injong I memarun*) (Im 2003: 349)) と考えている²⁰⁾。

韓国系中国人は、アメリカや日本といった豊かな国に居住する在外韓国人と比較して、韓国政府が彼らを差別していることに対して特に不満を感じている。彼らに対する韓国政府の差別的処遇は、1999年の「出入国および在外韓国人の地位に関する法律」——その法律は、「在外同胞」(“overseas brother” (*choeoe tongp'o*)) という地位を中国と(かつてのソビエト) 出身の朝鮮民族には付与していない——のなかに明確に見て取れると確信している。1997年の金融危機の後には、アメリカや日本、その他の西洋の国ぐにに居住する金持ちの在外韓国人から韓国に投資することを促すために、この法律は在外韓国人が自由に韓国を訪問し経済活動を行うことを認めた。その法律の立法過程において、「在外韓国人」とは、朝鮮民族で海外の市民権を有するかもしくは有していない海外の居住者というように、広義の概念で定義されている。しかしながら後には、1948年(韓国政府が設立された年)以降に韓国から出国した者とその直系の子孫にのみ適用されるように修正されている。これは韓国の労働市場に韓国系中国人とソビエト系中国人が殺到することを防ぐためと²¹⁾、中国政府からの抗議をくい止めるためである²²⁾。

韓国系中国人は自らを朝鮮民族もしくは在外朝鮮民族と考えているがゆえに、韓国人から未熟練労働者として処遇された場合に、強い不満と疎外感を抱く。韓国系中国人の移民労働者は、かりに韓国と日本で同じような扱いを受けるとしても、日本においてよりも韓国において感情を害されると韓国系中国人の識者たちはのべている。朝鮮民族(韓国人によってあたかも外国人(日本人)に対するかのようにひどい扱いを受ける場合に、より感情を害されるからである (Kim 2001b: 426-427)。これは日本に居住する日系ブラジル人の場合と同じである。というのは、日系ブラジル人は日本人と民族上のつながりを有しているがゆえに、彼らを感じる疎外感の程度は日系以外の労働者が経験

するよりも大きい (Tsuda 2000)。

韓国における周縁化された地位に加えて、このような差別的処遇は彼らが抱く極めて大きな疎外感をより大きくさせると韓国系中国人は感じていた。韓国系中国人の小説家のホ・リョンサン (Ho Ryonsun) は、韓国への韓国系中国人の帰還移民に関する小説 (『風の花』 (*Flower of Wind*, 1996)) において——主人公のひとりたるジハ (Jiha) がホン (Hong) から、なぜ韓国系中国人は韓国に対してそれほど批判的なのかと聞かれたときに、韓国人ジャーナリストに向かってつぎのように大声で答えている：

それは中国からやってきたわれわれに対する韓国政府が差別的な政策を行っているからですよ。いったいなぜ韓国人は、韓国系の人や韓国系の日本人に自由な入国を認めているのに、韓国系中国人に対しては入国ビザの発給を制限するのでしょうか。それは彼らは金持ちで私たちは貧乏だからではありませんか。そうでしょうか？ (Hŏo 1996 : 157)²³⁾。

彼らの韓国でのいやな経験のゆえに、彼らは韓国に対して強い批判的感情を抱いた。このような否定的な感情は1990年代半ばまでには中国における韓国系中国人社会において広範に拡がった。そしてまた、彼らは彼らの生国に対して、自らのアイデンティティと生国との結びつきを反映させている。

「生国」に対する自己投影とアイデンティティ

韓国での差別や疎外そして潰え去った多くの「コリアンドリーム」といったことを経験することで、韓国系中国人の帰還移住者は韓国に対して批判的になったばかりではなく、彼ら自身の「生国」の意味と彼らが「朝鮮民族」であることの意味を反省的に考える機会を提供した。民族的な生国とアイデンティティに関するそのような省察は、1990年代すなわち中国と韓国における韓国系中国人のコミュニティにおいてこの問題に関する何冊かの書物と論文が刊行されたときにもっとも盛んに行われた。「生国」に関する大半の議論においては、エスニック集団の出身地たる民族的な故国と、彼らを「育て」(“parented”) 受け入れてくれた中国という故国とを、彼らは区別していた。これらの双方の故国のいใดでは、彼らが韓国で大きな失望を経験してからは、「彼らを受け入れて育ててくれた」中国を上位においている²⁴⁾。

Kim (1998) は、「生みの母」(“biological mother” (韓国系中国人が「生を授けてくれた愛情 (“love of giving birth” [*naajun chŏng*]) を受けている」と、「育ててくれた母」(「育ててくれた愛情 (“love of parenting,” [*kiwojun chŏng*]) のメタファーを用いている。

チャンズ・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

中国は韓国系中国人が折に触れて頼らなければならない国であるのに対して、韓国は彼らが単に客人にすぎない場所にすぎないと Kim (1998 : 203) は主張している。彼らにとってのそのような「育ての母」というレトリックは韓国系中国人の議論においてはよくなされている。彼らの新聞である *Hungnyonggang Daily* は、彼らが中国から受けた「育ててくれた愛情」に背いてはならないと社説 (1995年9月2日) でのべている。

同様に Chong (1996) は「結婚した娘」——韓国系中国人が中国人と結婚した朝鮮民族の娘にたとえられている——というテーゼを用いて、もともとの故国 (朝鮮) よりも受け入れられた故国 (中国) の方が重要であることを強調している。鄭に拠ればそのような娘は、まずは彼女の夫とその両親に仕え、そして夫の家族の生活様式を学ばねばならない。朝鮮民族の伝統を維持しつつ、朝鮮民族の娘は自らの家族とは一定の距離を保たなければならない、と助言している。中国における移民マイノリティとして韓国系中国人は、民族的な故国と強い紐帯を確立することによって中国に脅威を与えるべきではないという警告すら発している (Chong 1996 : 271-272)。この「結婚した娘」のテーゼは、かりに韓国系中国人が民族的な故国との紐帯を強化しようとするならば、支配民族たる漢民族からの反撃がくるであろうという、韓国系中国人が抱いている潜在的恐怖心を示している。

このような鄭の同化主義者のスタンスを批判して Kim (2001a : 4-69) はつぎの点を強調する。すなわち、韓国系中国人は彼らが中間的な性格を有していることを誇るべきであり、また彼らが中国公民であることを忘れてはならないが、「朝鮮民族」であり「中国人」であるという利点を生かすべきであることを強調している。また何は、韓国で経験した差別的な処遇は「中国人」としてのアイデンティティを強化させたと指摘している (Ho 2001b : 466)。小説の『風の花』 (*Flower of Wind*) において韓国系中国人たる仁圭 (In-gyu) は彼の親友たるジハ (Jiha) に、韓国を去って「故国」に帰るように勧めつつつぎのような最後のことをのべている。

お願いだから今すぐにぼくたちを生んでくれた故国に戻ってくれ！ 故国は雨風を防いでくれる衣服のようだ。ぼくは死ぬときには故国にぼくの頭を向けるよ。(Ho 1996 : 270)

韓国系中国人の知識人のあいだでのこれらの議論において、彼らの生国 (中国) が父祖の故国 (朝鮮) よりも重要であるということを韓国系中国人が認識していることは明らかである。そしてまた彼らのアイデンティティを「朝鮮民族」としてより「中国人」として明示している。8名の私のインフォーマントは、帰還後には自分たちは「朝鮮民

族」よりも「中国人」であると認識していると語っている。そして他の4人は「ハイブリッド」なアイデンティティを含めて中国人でもあり朝鮮民族でもあると感じていると語っている。

結 論

過去15年間の韓国系中国人と韓国人のあいだの民族的な再会は、双方の集団において、お互いに対する見方の変遷を経験したことを示している。民族的なナショナリズムの観念にもとづいて韓国人は、韓国系中国人の「朝鮮民族性」(Koreanness)を理想化し、また民族の将来にとっての素晴らしい「資源」と考えつつ、中国からやってくる同胞に関するロマンチックな見かたを当初は抱いていた。しかし韓国への大規模な韓国系中国人の民族上の帰還がはじまって以後には、中国からやってくる同胞は発展が遅れていて、信頼に値せず、またなによりもアイデンティティにおいて疑わしいという結論に至ったのである。

同じく韓国への民族上の帰還以前には韓国系中国人は、遠い昔に失われた父祖の故国として韓国への肯定的な見かたを展開した。そしてこのような肯定的な見かたは、韓国での雇用機会とともに中国の改革開放以後の社会・経済的な地位の相対的低下によって強化された。しかしながら、韓国での移民労働者としての過酷な経験を通じて、韓国系中国人は韓国政府と彼らの韓国同胞——彼らを蔑視し同胞愛に欠けると見ていた——差別的な処遇に深く失望していた。日本における日系ブラジル人と同様なそのような経験(Tsuda 2003; 本書9章参照)を通じて韓国系中国人は、彼らは民族上の故国(韓国)においては「朝鮮民族」としては受け入れられることはできず、したがって彼らの将来は生国(中国)にあるということを発見した。つまり韓国系中国人は自分たちが「朝鮮民族」であるよりも「中国人」であると認識したのである。

韓国での韓国系中国人の民族上の帰還の事例は、民族上の帰還者のアイデンティティは——本質主義的な観念にアイデンティティが依拠している場合にも——民族的な故国における経験次第で変化しようということを示している。したがって民族的な故国における韓国系中国人のアイデンティティの変遷の事例は、朝鮮民族の通例のエスノナショナルな観念(それは朝鮮民族の「血統」に対する確信に依拠している)に対して疑義を提示している。日系ブラジル人(Tsuda 2003; 本書9章参照)やドイツ、イスラエル、ロシア(本書第4, 8章; Münz and Ohliger 2003)のような他の多くの民族上の帰還の事例と同様に、韓国系中国人もまた民族上の故国で差別と疎外を経験し、それらがア

チャンズー・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

イデンティティの転換へと導いたのである。

本章に対するタケユキ・ツダ (Takeyuki Tsuda) の貴重なコメントに心から感謝します。

原注

- 1) 漢民族と朝鮮民族の満州への移民とロシア民族のシベリアへの移民は、19世紀後半と20世紀初頭における世界の移民動向における重要な一部をなしている。しかしながらその事実は世界の移民史においてあまり重視されていない。McKeown (2004) 参照。
- 2) 70万人の帰還移民の内およそ40万人が朝鮮半島南部に、そして残り30万人が朝鮮半島北部に帰還した。移民が帰還した後にさらに100万人の朝鮮民族が1946年の時点で満州に残留していた (Kwön 2005: 17-18)。
- 3) 延辺は朝鮮族が多数を占める中朝国境に近い初期の朝鮮族移民の中心であった。
- 4) 朝鮮族の民族的なナショナリズムに関しては Shin (2006) 参照。
- 5) 2003年には韓国での外国人労働者総数は57万人 (内、24万4千人が正式書類を持たない移民労働者) に達した。そして2003年末では15万人の朝鮮族労働者が居住していた (Kwön and Pak 2005: 38)。2008年には韓国内での朝鮮族労働者数は37万5千人であった。
- 6) 私は2004年11月にソウル南部の安山で12名の朝鮮族帰還者にインタビューした。そして2005年6月に中国吉林省の延辺朝鮮族自治州の州都たる延吉を訪問し、延吉に戻るまで2年以上韓国で働いていた15人の朝鮮族にインタビューを行った。
- 7) この点に関しては、韓国系中国人は、プランテーションの労働者としてハワイに渡り、伝統的なライフスタイルを喪失した同胞とは異なり、満州の朝鮮民族は伝統的な朝鮮民族の小作農 (peasant) の文化を維持していた。
- 8) 中国は民族的マイノリティに対して寛容であるといわれているが、しかし現実には中国の少数民族は経済的に周縁化され、政治的、文化的にも抑圧されている。中国の民族的少数者に関する問題については Rossabi (2004) と Glandney (2004) 参照。
- 9) しかしながらホフマンは——社会主義者と漢民族の様式を受け入れなければならないとしても——民族的衣装や新聞、雑誌、そして延辺大学を含む学校、等々を維持することができた故に、民族に対する抑圧という点においては比較的恵まれている、と指摘している。(Hoffmann 1986: 17)
- 10) 中国牡丹江と吉林省出身の朝鮮族帰還労働者へのインタビュー。
- 11) Tsuda (Capter 9) と Takenaka (Chapter 10) が指摘しているように、民族的

帰還はさまざまに扱われ、したがって出身国のグローバルな政治的、経済的位置に応じてさまざまなアイデンティティの変容を被る。

- 12) 韓国の新聞が200万人の中国在住の朝鮮族と50万人のソビエト在住の朝鮮民族を「海外同胞」に含めはじめたのは、1980年代後半になってからである (Haeco Tongp'o)。外務・通商省は韓国系中国人とソビエト在住朝鮮民族を2003年の公式報告から加えだした。
- 13) 韓国系中国人女性は一般に、伝統的な女性の価値観を保持する無垢な性格として描かれる。これは写真やテレビドラマで示されている (たとえば、「純真な19歳」(The Pure-Hearted Nineteen-Year-Old, 2006))。中国とウズベキスタンの朝鮮族女性の韓国人のポピュラーな文化的表現としては Song (2006) 参照。
- 14) Piguori はリンゴと梨のあいのこの果物の名前で、それは延辺地区の韓国系中国人にはなじみの果物である。2004年にソウルの新聞社によって企画されたこの写真展は最もポピュラーなものである。
- 15) それはまた韓国の観客に対して優越感を与えた。グリーンカーは1993年にソウルで開かれた北朝鮮からの日用品の展示の場合にも同様な事例を見いだしている。グリーンカーによれば、そのような写真を通して韓国人は北朝鮮人を、グローバルな経済秩序において占めている優位な地位を再確認する「他者」として観ているのである (Grinker 1988 : 49-72)。
- 16) 主要新聞は韓国人上司による韓国系中国人に対する虐待に対して同情的に報道していたが、韓国人のこの事件に関する衝撃と韓国系中国人に対する怒りはその時の新聞の「読書欄」によく現れていた。
- 17) 韓国での私のインフォーマントの大半が、彼らは韓国人が自分のことを中国人とは知ってほしくはないと語った。
- 18) 2006年には韓国には22万人以上の不法労働移民がおり、そのうち3万7千人が韓国系中国人であった (法務省)。
- 19) それでも多くの韓国系中国人は韓国にとどまることを欲しているが、彼らの多くは概ね中国では年金をもらっていない元農民である。その他の人は韓国に親族がある場合で、たとえば、年老いた両親でその娘が韓国人と結婚したあと韓国に暮らしている場合。これらの場合以外は、大半の韓国系中国人労働者は、韓国で稼いだお金で相対的に良い暮らしができる中国に帰ることを望んでいる。
- 20) 日系ブラジル人の民族的帰還者がホスト社会に関して同様な見解、「冷たさ」をのべていることをツダは報告している。(Tsuda 2001 : 70)
- 21) 3年後にその法律は裁判所によって違憲であると宣言された。2003年に同法が改正されたときにはなお、韓国系中国人とソビエトの朝鮮民族は優先的扱いから排除されていた。

チャンズー・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

- 22) 中国政府は韓国系中国人が彼らの父祖の故国と維持している紐帯に関して重大な関心を示しており、在外朝鮮民族の出入国と地位に関する法を制定、改正した時に韓国政府に対して一定の警告を発していた。
- 23) 同様に、韓国の韓国系中国人労働者（正式書類を有していない）は、「中国が韓国よりも豊かな国であったとすればこのように扱われることはなかっただろう」、とのべている（*Chosun Daily*, December 24, 2001）。
- 24) ナディア・キム（本書第12章）はつぎのようにのべている。韓国在住の韓国系アメリカ人帰還者もまた、ある場所が故国だと感じさせるのは、共有されたアイデンティティではなく文化的な親密さと彼らへの理解であると認識している、と。

References Cited

- Choi, Woogli. 2005. *Chungguk Chosönjok Yön'gu* [A Study of Korean Chinese]. Asan, Korea: Sunmoon University Press.
- Chön, Song-rim. 1991. *Yönbyön Kyöngje Chiri* [Economic geography of Yanbian]. Yanji, China: Yönbyön Inmin Ch'ulp'ansa.
- Chön, Chu-yöng. 1997. *Saeroun sijakeüi yölmang* [The desire for a new start]. Ulsan, Korea: Ulsan National University Press.
- Chöng, P'an-ryong. 1996. *Segyesogüi uri minjok* [Our nation in the world]. Shenyang, China: Ryonyöng Minjok Ch'ulp'ansa.
- Chöng, Sin-ch'öl. 2000. *Chungguk Chosönjok: Küdürüi mirae nün* [Etnic Koreans in China: Their future]. Seoul: Sin In'gansa.
- Gladney, Dru C. 2004. *Dislocating China: Reflections on Muslims, Minorities, and Other Subaltern Subjects*. Chicago: University of Chicago Press.
- Glick Schiller, Nina. 1997. "The Situation of Transnational Studies." *Identities: Global Studies in Culture and Power* 4 (2): 155-166.
- Grinker, Roy Richard. 1998. *Korea and Its Futures: Unification and the Unfinished War*. New York: St Martin's Press.
- Guarnizo, Luis Eduarudo. 1997. "The Emergence of a Transnational Social Formation and the Mirage of Return Migration Among Dominican Transmigrants." *Identities: Global Studies in Culture and Power* 4 (2): 281-322.
- Gurr, R. T. 1970. *Why Men Rebel*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Harvey, D. 1989. *The Condition of Post-Modernity: An Inquiry into the Origins of Culture Change*. New York: Blackwell.
- Hö, Myöng-ch'öl. 2001a. "Chungguk Chosönjok chöngch' esönggyujie kwanhan sago" [Reflections on the maintenance of the identity of Chinese Koreans]. In

- Chungguk Chosŏnjok* Kim and Hō, eds., 246-283.
- . 2001b. “Chungguk Chosŏnjok sahoewa Hanguk sahoeganui munhawagyoryu hyŏnhwangmit kū taean” [The current status and alternative of exchange relationship between Chinese Korean Community and South Korea society]. In *Chungguk Chosŏnjok*, Kim and Hō, eds., 451-481.
- Hō, Ryōnsun. 1996. *Paramkkot* [Flower of wind]. Seoul: Pōmusa.
- Hoffmann, Frank. 1986. “The Korean Minority in China: Education and Publishing.” *Korea Journal* 26 (4) : 13-26.
- Im, Kye-sun. 2003. *Uriege tagaon Chōsonjogūn nuguin’ga* [Who are the Chinese Koreans who came to us]. Seoul: Hyōnamsa.
- Kim, Chae-guk. 1998 [1996]. *Hangugūn ŏpta* [No more South Korea]. Mudanjiang, China: Hūngryonggang Chosŏn Minjok Ch’ulp’ansa.
- Kim, In-sŏn. 2004. *Rossiya changsagli* [My experience of peddling in Russia]. Yanji, China: Yōnbyōn Inmin Ch’ulp’ansa.
- Kim, Kang-il. 2001a. “Chungguk Chōsonjok sahoe chiwiron” [A thesis on the status of ethnic Koreans in China]. In *Chungguk Chosŏnjok*, Kim and Hō, eds., 3-44.
- . 2001b. “Nambuk t’ongire issōsō Chungguk Chosŏnjok ūi yōkhal” [The role of Korean Chinese in the unification of the two Koreas]. In *Chungguk Chosŏnjok*, Kim and Hō, eds., 414-450.
- Kim, Kang-il, and Myōng-ch’ŏl Hō, eds. 2001. *Chungguk Chosŏnjok Sahoēui munhwa usewa palchŏn chŏllyak* [Korean Chinese: Their cultural power and development strategies]. Yanji, China: Yōnbyōn Inmin Ch’ulp’ansa.
- Kim, Kyu-bang. 1998. *Yōnbyōn Kyōngje Palchŏn Chŏllyak* [Economic development strategy for Yanbian]. Yanji, China: Yōnbyōn Inmin Ch’ulp’ansa.
- Kim, Si Joong. 2003. “The Economic Status of and Role of Ethnic Koreans in China.” In *The Korean Diaspora in the World Economy*, C. Fred Bergsten and Inbom Choi, eds. Institute for International Economic Special Report 15. Washington, DC: Institute for International Economics, 101-127.
- Ku, Chong-sŏ. 1995. “Pōmhan minjockchu’ūiga21-segi Hankug’ui sŏnt’ aek” [Pan-Korean Nationalism is the choice of Korea in the 21 st Century]. *Win*, August, 176-179.
- Kwōn, Taihan. 2005. “Chosŏnjok ingu’ui ch’use” [Population trends of ethnic Koreans in China]. In *Chungguk Chosŏnjok Sahoēui Pyōnhwa: 1990-nyŏn ihŭrul chungsimūro* [The Changes of China’s ethnic Korean society: Post-1990s], Taihan Kwōn and Kwang-sōng Pak, eds. Seoul National University

チャンズー・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

Press, 15-34.

- Kwōn, Taihan, and Kwang-sōng Pak. 2005. "Hanguk Chosōnjok nodongja chiptanūi hyōngsōng" [The formation of the Chinese Korean labor group in South Korea]. In *Chungguk Chosōnjok Sahoeūi Pyōnhwa: 1990-nyōn ihurūl chungsimūro* [The changes of China's ethnic Korean society: Post-1990s], Taihan Kwōn and Kwangsōng Pak, eds, Seoul: National University Press, 147-175.
- Lee, Chae-jin. 1986. *China's Korean Minority: The Politics of Ethnic Education*. Boulder, CO: Westview Press.
- Lie John. 1998. *Han Unbound: The Political Economy of South Korea*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Mckeown, A. 2004. "Global Migration, 1846-1940." *Journal of World History* 15 (2): 155-189.
- Mūnz, R., and R. Ohliger, eds. 2003. *Diasporas and Ethnic Migrants: Germany, Israel, and Post-Soviet Successor States in Comparative Perspective*. London: Frank Cass.
- Pak, Kōyng-ri. 1990. *Malli changsōngūi nara: Pak Kyōng-ri Chungguk kibaeng* [Visiting the Great Wall country: Pak's records of trip to China]. Seoul: Tonggwang Ch'ulp'ansa.
- Park, Yong-bum. 1994. "The Turning Point in International Migration and Economic Development in Korea." *Asian and Pacific Migration Journal* 3 (1): 149-174.
- Rossabi, Morris, ed. 2004. *Governing China's Multiethnic Frontiers*. Seattle: University of Wasington Press.
- Ryang, Ok-kūm. 2001. "Chungguk Yōnbyōn Chosōnjok Chach' iju minjok kwangyeūi hyōngsōngkwa palchōn" [The formation and development of ethnic relations of the Yanbian Chinese Korean Autonomous Region]. In *Chungguk Chosōnjok*, Kim and Hō, eds., 138-165.
- Shin, Gi-Wook. 2006. *Ethnic Nationalism in Korea*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Song, Changzoo. 2006. "Nostalgia for Women of Purity, Honesty, and Strength: Images of Diasporic Women in Korean Film." Paper presented at the 2006 Association for Asian Studies Meeting, San Francisco, April 6-9.
- To, Hūng-ryōl. 1992. "Chungguk Sosuminjok Munje wa Chosōnjok Sahoe" [China's Minority Question and Ethnic Koreans in China]. In *Chungguk Chosōnjok Sahoe Yōn'gu* [A study on the society of ethnic Koreans in China], Yōng-mo

- kim, ed. Seoul: Korea Welfare Policy Institute, 165-191.
- Tsuda, Takeyuki. 2000. "Acting Brazilian in Japan: Ethnic Resistance Among Return Migrants." *Ethnology* 39 (1): 55-71.
- . 2001. "From Ethnic Affinity to Alienation in the Global Ecumene: The Encounter Between the Japanese and Japanese-Brazilian Return Migrants." *Diaspora* 10 (1): 53-91.
- . 2003. *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*. New York: Columbia University Press.
- U, Kil, and Myōng-hūi Han. 2002. *Chungguk esō chari chabun Han'gugindūl* [South Koreans established in China]. Seoul: Kumto.
- Yi, Kwang-gyu. 1994. "Hanguk chōngbunūn haeoe Hanin chōngch'aegūl pakkwōya handa" [The Korean government should change its overseas Koreans policy]. *Sahoe Pyōngnonūi kil* 15 (2): 23-29.
- Yu, Myounggi. 2002. "Dilemma of Joseon People: Ethnicity vs. Nationality." *Korea Focus* 10 (6): 100-115.

[2] チャンズー・ソン「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂
——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが
可能」

I. 要 点

1990年代から韓国の人口は高齢化し出生率も低下している。そして同時に海外に暮らす韓国人の数は相当に増加している。このような傾向は韓国の国際的、経済的地位の低下をもたらす恐れがある。そこでこのような海外移住という新たな問題がもたらすマイナスの効果を緩和するために韓国政府は海外在住の700万人の韓国人を〔本国たる韓国に〕包摂 (engage) し、彼らディアスポラを国家の長期的発展のための積極的な力へと転換しようとしはじめている。

II. ディアスポラ包摂政策への賛否両論のポイント

(1) 賛成論:

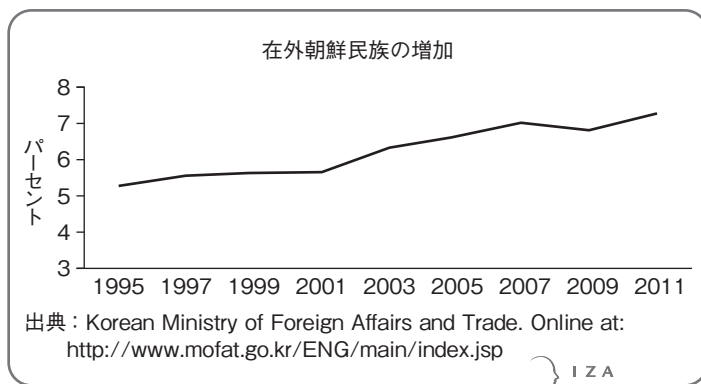
- (a) 韓国人のディアスポラは増加し続け、現在720万人を超えている (2011年の韓国人口の11パーセント)

チャンズ・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

- (b) 韓国は在外朝鮮民族との結びつきを強化している
 - (c) 1990年代に韓国はディアスポラを国家の将来にとっての貴重な資源として認識しはじめた
 - (d) 現在韓国内の企業と海外の朝鮮民族が経営している企業とのあいだで相当な協同行われている
 - (e) 頭脳流出が1960年代と1970年代には懸念されていたが、現在は韓国と中国は科学者と技術者の帰還を経験している
- (2) 反対論：
- (a) 在外朝鮮民族は一定の市民的義務（納税や徴兵の義務）を果たしていない故にディアスポラを包摂することに反対する者もいる
 - (b) 韓国の強固なナショナリストの伝統の故に二重国籍の承認は抵抗に遭遇している
 - (c) 韓国のディアスポラ包摂政策は根本的にエスノナショナリズムと見られる
 - (d) 国内に200万人の朝鮮民族を擁する中国は韓国の政策に懸念を抱いている

Ⅲ. 本稿の主な主張点

越境主義の拡大と人口減少に対応するために、海外に在住する朝鮮民族に対して国境を超えて実質的な市民権を与えることにより、韓国は有力な700万人のディアスポラを包摂するための政策を推し進めている。その政策は経済上の利益とならんで民族上の故国への忠誠心を築くことで政治的、文化的な利益をももたらしている。政府が設立した「在外朝鮮民族基金」(Overseas Koreans Foundation) は、ディアスポラのあいだで



の朝鮮民族としてのアイデンティティを促進し、彼らとの経済的、政治的な協同を強化し、拡大するとともに、ディアスポラ相互間と韓国における朝鮮民族とを結びつけるネットワークを構築している。

IV. 動機づけ

1990年代以来世界の国々にはグローバリゼーションと越境主義から生じる諸課題に直面している。ある国から他国へと移動し、国境をまたいでさまざまな活動に携わる人びとの数が増加するにつれて越境主義は増大していく。このことは国家が彼らを統制することを——とくに人口減少の一因になっている場合には——より困難なものにしている。

韓国は人口統計上の危機と越境主義の影響に直面しているこれらの国のひとつである。急速な高齢化（日本よりも高齢化のスピードは速い）と出生率の低下（「経済協力開発機構」中で最低）、移民としての中産階層の継続的流出、そして経済成長の鈍化、等々の問題を抱えている。さらにまた増加する外国人居住者が、民族的同質性と一国としての「朝鮮民族の」統合という目標の上に構築された韓国のアイデンティティに脅威を与えている。このような事情が、世界に移住している700万人の有力なディアスポラを韓国と結びつけようと決意した背景に存在する。

V. 賛否両論

新たな産業化計画に国家が着手した1960年代初頭の韓国の政策策定者にとって、人口過剰と貧困問題は大きな課題であった。1960年代初頭には韓国は2700万の人口を有し、ひとり当たりのGDPがわずか100ドルに過ぎなかった。さらに1970年までには人口は3200万人になり、さらにまた1980年までには3800万人を超えていた。産業化計画の効果が出るにつれて人口は地方から都市へと流れていった。韓国における都市化率は1960年代初頭の人口の30パーセントから1980年代までには70パーセントにまで膨れ上がった。国家発展政策の一環として韓国はつぎのふたつの主要なステップを採用した。

- 人口過剰に対処するために政府が1962年に集中的な家族計画プログラムを開始すること
- 人口圧力を緩和し外貨を稼ぐために労働者を海外に送り出すこと

1980年代末までには状況は劇的に変化した。地方から都市の産業の中心地への男性の移住はすでに収束した。しかしながら地方からの女性移住者はなお続き、その結果地方の男女比に大きな不均衡がもたらされた。後に都市の男性は、他国から結婚のために

チャンズー・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

やってくる女性たる「通信販売花嫁」(mail-order brides)を求めはじめた。韓国の都市では労働供給が少なくなり、給与が上昇した。労働力不足、とりわけ低賃金の肉体労働力不足が顕著となったために、1980年代の終わりまでには韓国は、発展の遅れた他のアジアの国々からの移住労働者受け入れを奨励した。

他方で高齢化が急速に進み、また経済成長も鈍化していた。さらに過去10年間の女性ひとり当たりの出生率は1.2となり、安定人口率を下回っていた。高齢化と少子化の同時進行によって韓国の人口は2030年には減少しはじめる予測された。このことは、たかだか20年前には人口過剰を懸念し、家族計画と海外移住を奨励していた政策策定者に対する警鐘となった。

ただしとくに中産階層家庭の海外への移住は続いていた。1980年代以降は移住者の数は減少したが、多くの中産階層家庭はオーストラリアやカナダ、ニュージーランド、アメリカなどによりよい生活を求め、韓国ほど競争の激しくない教育環境を享受するために韓国を去っている。他方で韓国における非・韓国人居住者——その多くは移民労働者や通信販売花嫁としてやってきた——はさらに増加し続けていた。このような事態は、世界中で民族的に最も同質的な社会であった韓国社会に対して別の課題を突き付けている。

これらすべての動向は1990年代以来の経済成長の停滞に拍車をかけた。韓国経済は1960年代、1970年代、そして1980年代を通じて急速に成長したが、2000年以後は経済成長は停滞した。そして、韓国の経済は巨大な隣国たる中国などの市場経済の勃興のなかで凌駕されるのではないかという不安をかきたてた。

これらの課題に直面して、韓国はあらゆる利用可能な資源にもとづいて解決策を見いだすことを強いられた。そのような可能性のひとつが700万人の朝鮮民族のディアスポラであった。世界中に散っているそれらの人びとの規模は韓国人口のほぼ11パーセントに相当するのである。

VI. 韓国人ディアスポラの包摂

1990年代初頭までは韓国政府はディアスポラ——中国在住の200万人の朝鮮民族とかつてのソビエトの在住の50万人を含む——には大きな関心を払っていなかった。しかし政府は彼らディアスポラを、グローバル化が急速に進む現代世界において極めて価値ある資源と認識するようになった。ディアスポラに投資することは韓国の未来に対する投資と見られたのである。

1991年の政府統計上のデータはこのような新しい見かたを反映している。すなわち、中国と旧ソ連の朝鮮民族がはじめて公式の「在外朝鮮民族」(“Overseas Korean”)統計に組みこまれている。韓国が中国とロシアというかつての共産主義国との外交関係の正常化を追求する「北方政策」(“Nordic Policy”)に従って、韓国政府はこれらの国の朝鮮民族と——朝鮮語教育を援助し彼らの故国を訪問する機会を与えることで——連携しはじめた。

1990年代中葉までには政府は、ディアスポラ包摂政策を積極的、体系的に推し進めはじめていた。ディアスポラの朝鮮民族と民族上の故国の結びつきを強化し、彼らの受け入れ社会にうまく定着することを支援する目的で「在外朝鮮民族基金」(Overseas Korean Fund)を設立した。この任務を遂行するために基金はつぎの3つの目標達成を目指している。

- まず第1に、朝鮮民族ディアスポラのあいだの朝鮮民族とくに若者世代のアイデンティティを、教育上のサポートをすることで強化すること
- 第2に朝鮮民族ディアスポラと故国のあいだの経済的、政治的協働を強化し、拡大すること
- そして第3に、特定の国や故国、そして世界の他の地域に居住する朝鮮民族ディアスポラのあいだのネットワークを構築し、統合すること

1997年の基金設立直後にアジア金融危機が勃発した。韓国政府は朝鮮民族のディアスポラ、とりわけ豊かな国ぐにのコミュニティの人びとに援助を求めた。彼らの投資を呼び込むためには1999年制定の「在外朝鮮民族の移民と法的地位に関する法律」(Act on the Immigration and Legal Status of Overseas Koreans)の下で彼らに実質的な国境をまたぐ市民権を付与した。その法律は朝鮮民族のディアスポラに対して韓国に自由に入国し、事業を行い、また不動産を所有する権利を与えた。

**：域外国民と域外市民

国民は市民と同じくかつては概ねひとつの領域を基礎としていた。しかしすべての市民の域外の活動が増加するにつれて国民国家は、域外に居住する市民にも手を差しのべることが必要になった。そこで国民も市民も域外にも及ぶようになった。

法律上は当初、国内事情(労働市場の混乱)と外交上の配慮(朝鮮族は中華人民共和国公民であると主張する中国政府の反対)から、中国と前ソビエト在住の朝鮮民族を除外していた。しかしその後すぐに、居住国とは無関係にすべての朝鮮民族を包含するよ

チャンズ・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

うに法律改正がなされた（〔1〕 Park, J.-S., and P. Y. Chang. “Contention in the construction of a global Korean community: The case of the Overseas Korean Act.” *Journal of Korean Studies* 10: 1 (2005): 1-27.）。朝鮮民族ディアスポラは、韓国の政策策定者と国民にとって在外ディアスポラが重要な意味を有しているということを認知しつつ、世界中から政府の呼びかけに呼応してきた。在外中国人ビジネス会議（Overseas Chinese Business Convention）をモデルにして在外朝鮮民族基金は2002年に、年次の世界朝鮮民族ビジネス会議（World Korean Business Conventions）を主催しはじめた。

2010年に韓国政府はさらに進んで、二重国籍を認めるために国籍法（Nationality Law）を改正した。もっとも、認められる範囲は限定的で、高度な技能を有する外国人や婚姻によって移民した者、朝鮮民族出身者で養子になった者、そして65歳以上の朝鮮民族のディアスポラの一員、等々の人びとにのみ認定資格を与えた。二重国籍を認めることによって朝鮮民族ディアスポラと彼らの民族上の故国との結びつきを強化することが可能である。（〔2〕 Ionescu, D. *Engaging Diasporas as Development Partners for Home and Destination Countries: Challenges for Policymakers*. Migration Research Series No. 26. Geneva: International Organization for Migration, 2006;〔3〕 Mazzolari, F. *Dual Citizenship Rights: Do They Make More and Better Citizens?* IZA Discussion Paper 3008, 2007）これは韓国において長いあいだ培われてきた伝統たる国民の民族的同質性からするならば、重要な意味を有するステップであった。海外に在住する韓国国籍を有する者にも2011年に選挙権が与えられた。二重国籍を認め選挙権を付与するというふたつの政策上のやり方について、同様な政策を採用する他の国々におけると同様に韓国でも熱い議論が戦わされた。（〔4〕 Baubock, R. “Towards a political theory of migrant transnationalism.” *International Migration Review* 37: 3 (2003): 700-723.）法律上の改革に加えて財団の最も重要なプロジェクトのひとつが、朝鮮民族ディアスポラ同士のネットワークと故国の朝鮮民族とのネットワーク構築を手助けすることである。基金はたとえば「コリアネット」（<http://www.korean.net>）のようなオンラインネットワークを構築したり、東坡新聞（*Dongpo News* (<http://www.dongponews.net/>）や「在外コリアタイムズ」（*Overseas Koreans Times*）（<http://www.okitimes.co.kr/>）といったメディアを援助した。

基金が照準を合わせているひとつは、若い世代の朝鮮民族ディアスポラを包摂し、ネットワークを構築することと彼らの故国訪問を組織することである。これらのプログ

ラムを通じて若者世代の在外朝鮮民族を、彼らの父祖の故国の伝統や歴史、言語を学ぶために韓国に招待し、それによって朝鮮民族としてのアイデンティティを強めることである。参加者には豊かな西洋諸国からのみならず、中国やカザフスタン、ロシア、ウズベキスタンのような発展途上の国ぐにの若者世代の朝鮮民族ディアスポラをも含んでいる。このプログラムの参加者はネットワーク構築を奨励されている。さらに基金は世界中から朝鮮語の教師を、各自の地域で将来世代を教えることができるように韓国に招聘するプログラムも運営している。

また基金は、西洋や北アメリカに養子として居住している朝鮮民族を彼らの民族上の故国と再度結びつけるための特別プログラムも運営している。養子の受け入れ家族は一般に豊かな家庭なので、養子になった者は優れた教育を受けていることが多い。養子となった多くの朝鮮民族は居住国で影響力を持つようになっていく。また「女性・家族省」(Ministry of Women and the Family) は、外国人と結婚した朝鮮民族の女性のための同様な再統合プログラムを組織している。

ディアスポラの包摂は交易の推進と投資を通して経済的利益を得ることを目的としている。これらの活動は「世界朝鮮民族ビジネス会議」や「海外朝鮮民族交易者連合」(Overseas Korean Traders Association) を通じて行われている。しかしその政策は、長期的視野に立ってディアスポラの朝鮮民族を再度韓国人として統合することや、ディアスポラの朝鮮民族と彼らの民族上の故国とのあいだの文化的、社会的、そして政治的な結びつきを強化することにも照準を合わせている。韓国は居住地とは無関係に、すべての朝鮮民族を含む故国を去った朝鮮民族にとっての新しい故国を作り上げようとしているのである。

VII. ディアスポラ包摂の費用と便益

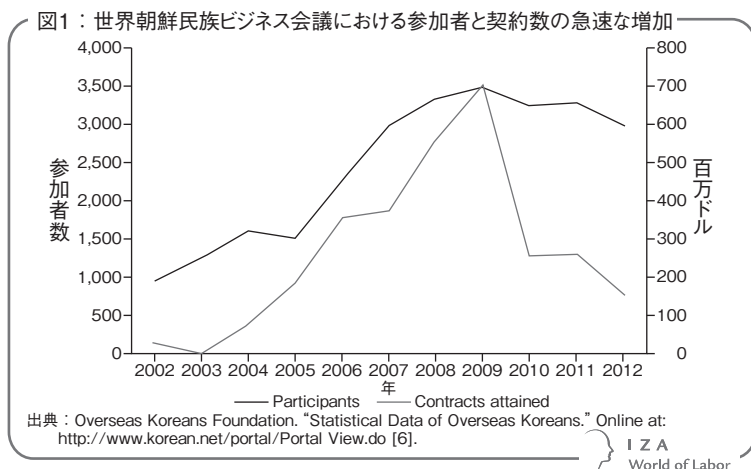
短期的視野からはディアスポラ包摂政策には多大のコストがかかる。税金を納めておらず徴兵にも応じていないディアスポラの人びとに政府の保護を拡大することはチャレンジングで議論のある論点である([5] Kalicki, K. "Ethnic nationalism and political community: The overseas suffrage debates in Japan and South Korea." *Asian Studies Review* 33: 2 (2009): 175-195.)。域外の市民が国政選挙に参加できるような制度を構築するためにもコストが必要である。しかしながら世界中の朝鮮民族のディアスポラのあいだの民族としてのアイデンティティを強化することは、彼らの民族的な故国への忠誠心を築くだろう。そしてこのことは韓国に対して長期的視野に立った利益をもたらす

チャンズ・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

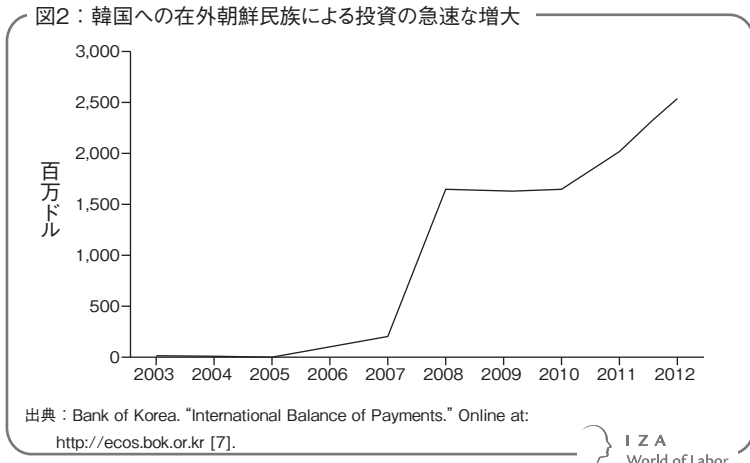
だろう。

VIII-1 経済上の利益

データは限られているが、ディアスポラ包摂政策は交易と投資を増大させている。ディアスポラに対して韓国は、経済的にも政治的にも故国の支援を推し進めるようなかたちで見守っているという長い歴史がある。朝鮮が日本統治下にあった1910年から1945年のあいだの長期にわたって、中国、ロシア、アメリカの朝鮮民族のディアスポラは、反日闘争を組織することで彼らの故国の独立を熱心に支持した。また後の韓国経済発展の初期段階においては、送金や投資を通じて韓国をサポートした。1997年のアジア金融危機では、豊かな西洋諸国の朝鮮民族ディアスポラは韓国に送金し、韓国生産品を購入することで韓国を援助した。年次の世界朝鮮民族ビジネス会議は韓国の企業と朝鮮民族ディアスポラの企業とのあいだの経済的な協同を推し進めた。2002年の第1回会議以来参加者の数は3倍になり、また年次総会において結ばれるビジネス上の契約数も増大した（図1）。



さらに在外朝鮮民族によって韓国にもたらされ、投資される資本は——アメリカで発生したサブプライム住宅ローン危機 (subprime mortgage crisis) によってたらされた世界規模の経済危機によって成長が急速に減速した2008年から2009年を除いて——着実に伸びていった (次頁の図2)。



ディアスポラの存在は通常は送り出し国と受入国のあいだの交易を増大させる。この交易には「ノスタルジア」すなわち「好み」(“taste”)の輸出も含まれる ([8] Choi, I. “Korean diaspora in the making: Its current status and impact on the Korean economy.” In: Bergsten, C. F., and I. Choi (eds). *The Korean Diaspora in the World Economy, Special Report 15*. Washington, DC: Institute for International Economics, 2003; pp. 9-27.)。

朝鮮民族のディアスポラにとって「海外朝鮮民族交易者連合」のような国境を超えた移民の組織は、韓国のグローバルな輸出の拡大に大いに貢献している。連合は交易に携わる若い朝鮮民族を訓練し、彼らの韓国人としてのアイデンティティを高めるために、年次の「次世代交易学校」(Next Generation Trade Schools) といったイベントを催している。最近のプログラムでは韓国での若者の失業問題への取り組みに関わる政府の重点事項をサポートしている。また連合は毎年韓国の若者にディアスポラが経営する世界中の会社でのインターンシップの多くの機会を提供している。またさらに地方の韓国の会社を動員して、韓国の輸出業者のために地方での市場開拓も行っている。

VIII-2 移民の帰還と頭脳流入

頭脳流失はよりよい機会を求めて多くの朝鮮民族がアメリカや西洋の国ぐににわたっていった1960年代と1970年代に社会問題となっていた。しかし朴正熙大統領(1961-1978年)の政権下では韓国は少数の移民の帰還者、とりわけ西洋から帰還した科

チャンズ・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

学者と技術者から利益を得ていた。多くの者が指摘しているように韓国と中国は、エリートへの帰還移民の科学者や技術者から利益を得ている（〔9〕Lowell, L. B., and S. G. Gerova. *Diasporas and Economic Development: State of Knowledge*. Institute for the Study of International Migration (Georgetown University), 2004. Online at: <http://siteresources.worldbank.org/INTPROSPECTS/Resources/334934-1322593305595/8287139-1327608098427/LowellDiaspora.pdf>). すぐれた教育を受けて西洋から帰還した第2, 第3世代の朝鮮民族——とくにすぐれた教育を受けている朝鮮民族出身の養子——はいまや韓国にとって貴重な資産である。

1990年代初頭以来移民帰還者が増加してきている。朝鮮民族のディアスポラはユニークにもつぎの二重の意味で韓国に利益をもたらしている。すなわち、安価な労働力（中国の朝鮮族）と高度な技術力を有する労働力（アメリカ系の朝鮮民族）の双方を提供することである。中国からの帰還労働者は韓国の労働市場に大きく貢献している。今日韓国には30万人以上の朝鮮族が——その大半が韓国人たちのやりたがらない労働に従事する肉体労働者である——居住している。また、高度の教育を受け、流暢な英語を話すアメリカのような国からの帰還者は韓国経済のグローバル化にも貢献している。韓国の企業で働くことで彼らは、韓国の企業文化や労働関係におけるグローバル化と民主化に貢献しているのである。

二重国籍を承認することはまたそれ以外の良き効果をも有している。西ヨーロッパや北アメリカに居住する年配の朝鮮民族のディアスポラは、彼ら自身の民族上の故国で引退生活を送ることを選んでいる。というのは、かつて居住していた国からの方が引退後の年金を受給しやすいからでもある。たとえばドイツで暮らしていた多くの朝鮮民族の炭鉱夫や看護師は、現在では韓国で引退生活を送っている。

1999年に韓国文部科学省はオンラインのコミュニティたる「グローバル韓国科学者・技術者ネットワーク」(<http://www.kosen21.org>)を立ち上げた。そのネットワークは韓国の科学、技術、そしてビジネスを推し進めるために、朝鮮民族のディアスポラの知識や技術を推進している。韓国と海外に在住している8万人以上の朝鮮民族の科学者や技術者がネットワークに参加し、連日300件以上の科学、技術上に関わる問題について質疑応答がなされている。そのサイトは韓国のビジネスコミュニティによってもよく利用されている。韓国のディアスポラ包摂政策は韓国の科学者や技術者、ビジネス関係者が相互にオンラインもしくはオフラインで結びつくことをサポートしており、それは強力な「頭脳流入」でもある。

朝鮮民族のディアスポラに対して政府が包摂政策を追求する理由のひとつは、ディアスポラ自身からの政治的圧力である。彼らは国家に相当するような強い民族上のアイデンティティを有し、また相対的に同質的である。朝鮮民族のディアスポラのこのような同質性は、地域や言語、宗教に応じて分離、分断されている中国やインドのディアスポラとは異なっている。

VIII-3 包摂政策の問題点

ディアスポラ包摂政策にはいくつかの問題点がある。韓国国内には、海外在住の朝鮮民族に市民権と二重国籍の権利を与えることに対して反対論がある。この政策に反対する人びとは、市民権などを付与されるのは納税や徴兵といった国民としての義務を果たしている者にも限定されるべきである、と論じている。そしてまた、その政策は民族主義的なナショナリズム (ethno-nationalistic) を表していると批判されている。それは韓国が朝鮮民族以外の居住者を韓国社会と経済に統合することを追求する、多文化主義政策とは相いれないのである。そして最後に、その政策は多くの朝鮮民族在住者を抱えている国ぐにとあつれきを引き起こすこともありうる。たとえば中国に居住する200万人の朝鮮民族に対して中国は市民権を与えているのである。

IX. 限界とギャップ

韓国のディアスポラ包摂政策が経済、政治、そして文化に及ぼす調節的諸効果に関する系統だった統計上のデータが欠如しているということ——と数量化することの困難さ——はこの問題を分析する際に重要な課題を課している。そしてディアスポラ包摂がもたらす一定の結果が得られたと判断するためには長い時間が必要であるので、その政策から得られる利益と効果を測定することをより困難なものとしている。韓国と同様な政策を追求している他の国ぐに（例えば中国、インド、イタリア、そしてメキシコなど）と比較検討することで、包摂政策の全体的な利益とコストをより明確にすることができらるだろう。

X. 概要と政策アドヴァイス

韓国のディアスポラ包摂政策は急速な高齢化と出産率の低下、中産階層の移住の増加、国内での朝鮮民族以外の居住者の増加、そして経済の低迷、等々による人口統計上の危機への対応策であった。その政策は700万人の海外在住者と韓国との関係を強化し、彼

チャンズ・ソン「名目上の兄弟——韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・
「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂——韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」

らが韓国の成長のために容易に貢献できるようになることが意図されていた。

ディアスポラ包摂政策は主としてふたつの領域に照準を合わせている。すなわち、朝鮮民族のディアスポラのあいだでの民族的なアイデンティティを強化することと、ディアスポラ同士のあいだもしくはディアスポラと彼らの故国の朝鮮民族とのあいだのネットワークを構築すること、である。

ディアスポラのあいだでの朝鮮民族のアイデンティティを強化するために韓国政府は、朝鮮民族のディアスポラに対して二重の市民権と投票権を付与した。またとくに若い世代の朝鮮民族のディアスポラのための教育プログラムと故国訪問プロジェクトを組織している。また以前に注意を払っていなかった朝鮮民族出身の養子や、外国人と結婚して海外に居住する女性に目を向け、彼らの多くが再度韓国国民となることを手助けした。

多文化主義的な背景を有する人びとが彼らの創造性やユニークな視点に関して貢献するグローバリゼーションの時代には、ディアスポラに手を差し伸べることは韓国に対して長期的視野に立った利益をもたらすだろう。

朝鮮民族のディアスポラ相互のあいだもしくは彼らと彼らの民族上の故国とのあいだのネットワークを強化するための基金とその他の政府機関は、ビジネス関係者（「世界朝鮮民族ビジネス会議」や「海外朝鮮民族交易者連合」）や科学者と技術者（「グローバル韓国科学者・技術者ネットワーク」）そして次世代のリーダーたちのためにさまざまな組織を立ち上げ、援助している。とくに「 코리아ネット」のようなオンライン新聞やその他のオンラインポータルを立ち上げ、援助することは朝鮮民族のディアスポラのあいだのネットワークを拡大し、統合するのに有用であった。そのような手段は世界に散らばる朝鮮民族が現に有している「想像の共同体」（“imagined communities”）を強化した。その政策は韓国を韓国の領域外にもまたがる国家へと転換したのである。

ディアスポラ包摂政策は韓国経済に対して相当の利益をもたらし、また長期にわたってもたらすものと期待されている。かなりの数のディアスポラ人口を有する小国は、ディアスポラ包摂政策を採用することで長期的視野に立った利益を得ることができる。そのような政策は——かりに基本的には民族主義的なナショナリズムと見られうとしても——増大するグローバリゼーションとトランスナショナリズムの諸課題に対する優れた応答であるだろう。

文 献 表

Gamlen, A. *Diaspora Engagement Policies: What Are They, and What Kinds of*

States Use Them? University of Oxford, Centre on Migration, Policy and Society Working Paper No. 32, 2006. Online at :

http://essays.ssrsc.org/remittances_anthology/wp-content/uploads/2009/08/Topic_19_Gamle_n.pdf

Inonescu, D. *Engaging Diasporas as Development Partners for Home and Destination Countries: Challenges for Policy Makers*. Migration Research Series No. 26. Geneva: International Organization for Migration, 2006.

Pellerin, H., and B. Mullings. "The 'diaspora option,' migration and the changing political economy of development." *Review of International Political Economy* 20: 1 (2013): 89-120. Plaza, S. "Diaspora resources and policies." In: Constant, A., and K. F. Zimmermann (eds). *International Handbook on the Economics of Migration*. Cheltenham, UK: Edward Elgar, 2013; pp. 505-529.

原著者謝辞

著者は IZA World of Labor の匿名のおふたりの査読者に対して私の原稿に対して貴重なコメントをいただいたことに謝意を表する。この論文執筆に際しては韓国政府によって設立された Academy of Korean Studies の援助を受けた。(MEST) (AKS-2012-BAA-2101)